大陸(南支)

青春を捧げた

軍隊生活の思い出(その一)

福島県 大竹 清 照

私は大正十(一九二一)年十二月二十七日、昔は高寺村外二ヶ村組合片門村といった所で生まれた。今は会津坂下町に合併し会津坂下町大字片門となった。昔は越後街道の宿場であり、祖父の代までは農業兼宿屋をやっていたと言う。八人兄弟の長男として生まれた私は農業を継がなければならない宿命にあった。またその頃は今のような農業機械もなく、すべて手が労働力であり、小学校一年ともなると幼い姉妹たちの子守

役やら、春の田植え期前の田んぼの代かき作業のため、馬の鼻取りと言って農作業の一役を担うのだった。

近くを流れる只見川は水清く、今は下流にダムや水力発電所が出来たが、私達の幼い頃は遠く今の新潟から九州船と言う船がいろいろな物資を積んで川を上がって来て、ここから若松等へ陸路を運ぶという交通の要所でもあったと言う。また夏は今のようプールというものはなかったもので、この只見川が唯一の水遊び場でもあった。なだらかな石河原にもなっていて、お母さん達はほとんどの方が川で洗濯をしていた。だからいつでも川原は大にぎわいであった。

小学校に入ると通学団と言う仲間に入り、五、六年生の年長者に水泳ぎ、または川幅七、八十メートルの

所を向こう岸まで泳ぎ着く川越し等の訓練をさせられたものだ。水深は深い所で約五、六メートルだが、流れが急で、向う岸へ着くにはかなり下流へ流され泳ぎ着く。自分も初めて川越えをした時、川の中ほどで疲れてしまって溺れそうになったことなどがあつたが、このようにして子供の頃から川で泳ぎを覚えていたので、後ほど戦地で役に立つことになった。

また秋になると鮭が産卵のため遡上して来て、産卵を終えた鮭が川岸でうようよしているのを捕まえたことがあつた。このようなのかな田園風景の世相も刻々と戦時色に塗り変えられ、満州事変、支那事変となり、私達小学校でも課外授業として、五、六年生になると戦争ごっこをやつたものだ。学校の裏山へ行き、空き缶や太鼓を叩いて機関銃や大砲などと言つて棒切れを持って敵陣地へ突入し「やあ！ やあ！」と棒でたたき合いをしたものであつた。

卒業後は専業農家として生計を立てなければならぬのだから、農業に対する専門知識を勉強するんだと

言われ、祖父母や両親の勧めで県農事試験場の練習生として農業の勉強をした。この頃ともなると大陸戦線の戦闘も激化して来て、部落の所々、方々の方のところに赤紙、すなわち召集令状なるお召しが来て、戦地に出征する先輩の方々があちらにもこちらにも出ていた。当時はこのような方々をお国のために行くんだと言つて、村民からは尊敬され、村中総出て塔寺駅まで、手に手に「日の丸」の小旗を持って、軍歌を歌いながら見送つたものだ。

目を追うにつれ、次から次へと召集令状が来て、自分はいつもその先頭に立つて軍歌の音頭をとりながら駅まで歩き、駅の向こう側の高い所へ上がつて、「日の丸」を振り振り軍歌を歌つて出征兵士の方々を見送つたものだった。遠からず自分もこのように歓呼の聲に送られて、戦地に赴くのも遠くはないのだと心に秘めていた。

昭和十六年四月、徴兵検査となつた。身体検査そしてレントゲン検査となり、終わつて検査執行官（藤井中佐）から「お前は胸部に異常が見られるので、来年

までに治して再検査をするように」と言われてびっくりにしてしまった。今日まで一度も医者になんかかかったこともない自分の体が、このような衝撃的な言葉に納得出来ず、執行官のところへ行き「これは何らかの間違いではないのでしょうか、もう一度レントゲンを撮って下さい」と言ったら「軍隊というところは、一度白と言ったら二度とやり直すことは出来ない」と言われてしまった。

よく調べて聞いて見たら、私の前にカメラを撮った人は肺浸潤で長い間入院していた方だったそうで、この人と間違えられたらしいことが分かったのだが、「鶴の一声」にどうすることも出来ず、帰宅するところがっかりして三日も寝てしまった。家中の者が心配して「寝ていたって仕方がないのだから、竹田総合病院にでも行って精密検査してもらったら」と言われたので、早速竹田病院に行き事情を話し、レントゲンなど精密検査してもらったら、何らの異常も認められず、病院の言うには「兵隊検査の場合カメラは小さいので前の人の事で、貴方も同様に見られたのでは

う。心配はいりませんよ」と言われた時は、今までの重苦しい気持ちは吹っ飛んでしまって元氣を取り戻すことが出来たのであった。

一年過ごして再び翌年の検査では甲種合格、しかも模範壮丁として検査官の前に立たされ、皆の前で表彰されたのでした。昨年はあのようなことを言っておきながら、まったく軍隊というところは自分の非は、どんな理由があるにせよ黒が白であっても、あくまでも黒と言いつつ切るところだということが分かった。

甲種合格ともなれば、いつ入隊通知が来るかも知れず、自分の身の回り、試験場の職務も全部整理して、晴れの入隊の日を待っていた。当時入隊予定の者は、神社等に武運長久の祈願、あるいは親類の家々に挨拶に回るのが習わしだったので、自分も十二月七日、挨拶回りに出かけたが、ふと同時検査を受けた友人宅へ寄ったら、「十二月十日、東部第二十四部隊入隊の通知は、もう十日も前に来たよ」と言う。

自分にはまだ何の通知もないので心配になり、一応

役場へ寄り兵事係の方に話したところ、「そんな大事な事は役場で忘れては行かない」と言われたが、なお念のためもう一度よく文書を見て調べてもらうこととした。そして自分はその足で塩坪の叔父さんの家、山都町館ノ原の祖母の実家等に挨拶回りに行っていたら、祖父が約八キロの道を歩いて知らせに来てくれた。「お前が役場に寄った後、兵事係が自分の机の引き出しをよく見たら、入隊通知が十日も前に来ていたのを忘れていたらしい」と言って、持って来た通知書を見ると「十二月十日、東部第二十四部隊に入隊」との事だった。

心に決めていたものの、あと三日とは召集令状と同じである。挨拶もそこそこにして、早速出発の準備に取りかかった。自分があの時役場に寄って念をおしたので間に合ったものの、同村の赤城君は北海道の営林署に勤めていたので、山の中にもいたら、入隊の日間に間に合うだろうか、他人の事まで心配したのでした。

いよいよ十二月九日、盛大な見送りを受けて、勇躍生まれ故郷を後にした。塔寺駅から若松駅まで途中では同じく入隊する方々が各駅々から歓呼の声に送られて、つぎつぎと乗り込んで来た。

我々の中支那派遣原第七九三五部隊要員として、原隊に出発するまで、ここ若松東部第二十四部隊に入隊ということである。この日はそれぞれ割り当てられた旅館に泊まることになり、その晩は、各地から集まった者同士、思い思いの話をしながら、明日からは軍隊生活という夢路をたどりながら眠りについた。

明けて十二月十日午前八時、我々は原隊から初年兵受領に來られた蓮田曹長に引率されて連隊の営門をくぐった。営門を通り、約五十メートル行くと連隊本部の前で「右向け右！」で不動の姿勢をとり、本部の玄関上の菊のご紋章に対し敬礼をしてから通る。

今日から軍人の一人であり、国のため天皇陛下のために死することを無上の光榮なり、と教育されていたのだ。我々は各中隊各班に編入され、自分は第十中隊第一班内務班に入ることとなった。

その内務班には、昭和十三年次、四年次兵といった古参兵やノモンハン事件の生き残りの方もいた。彼らから見たら我々は軍隊の幼稚園児のように思われたであらう、ここで多少内務班の日常生活等を教えてもらった。

ここでは日曜日は休日である。自分は同じ部落から召集で入隊している鈴木五郎さんという人を探しに行った。第三中隊の内務班に入ったら窓際のベッドの上において「おお、よく来たな、こちらへ来い」と言っている上等兵に「俺と同じ郷里から来た者だ。お前、酒係に行つて饅頭を買つて来い」と言い付けたのだ。鈴木さんは予備役でまだ一等兵であったが、軍隊というところは、兵のうちは、階級よりも一日でも早く入隊した者が上位だと言う。このようなことも初めて知った。

また彼は銃剣術を得意とし、自分が入隊前に幾度か銃剣術の手合わせをして知っていたので、明朝から朝の稽古に来るようにと言われた。自分は班の内務をや

らねばなりませんからお断りをしたら、鈴木一等兵は私の班の古参兵や班長に「明日の朝から銃剣術の稽古に借るから」と言つて承諾をとり、明日から稽古に出るようにした。権力というか、古参兵の言葉は他班内までも動かすのかと驚いたものだった。

翌朝から第三中隊の営庭で古参兵の猛者共と円陣試合の稽古を始めたのだが、十一人ほどの古参兵はだれ一人として自分に勝つ者がいなかったが、次の者と稽古を始めた時、自分の直突が胸に当たり後ろに突き倒れた。その古参兵は起き上がったかと思つたら、くやしさまぎれに私の首をおさえて「貴様は何中隊の者だ。顔を見せろ」と面を取ろうとする。そばにいた鈴木さんがこれを制止して「この者はついこの間入隊したばかりの初年兵だ」と言つたので彼も二度びっくり、それから四、五日毎朝稽古をした。

自分はここの連隊の兵隊ではなく、ここは原隊に行く間の客分としての期間で、すべての指示は蓮田曹長

殿の指揮で行動をするのである。今日は雪中行軍をするからと言うので衣服、軍靴、巻脚半など新しい物ばかり支給された。一番困ったのは軍靴が大きく靴下を何枚履いてもだぶだぶで歩くのに苦勞をしたものだが、軍隊というところはまたひとつ「珍言」がある。

「足に靴を合わせるのではなく、靴に足を合わせろ」と言う。駆け足をするのと靴の中で足が前後に行ったり来たりする。東山までの雪中駆け足には汗びっしょりになったが、原滝の昔の温泉千人風呂で汗を流し帰隊したものだ。

いよいよ第一線の原隊への出発の日がやって来た。約三週間の客扱いの元歩兵第二十九連隊の営門を四列縦隊で出て、若松駅まで市中を行進して行った。沿道では日の丸の小旗を振って「万歳！ 万歳！」と見送ってくれた。

営門を出て、二、三百メートルくらい行進した時、自分に向かつて「バンザイ！」と日の丸の小旗を振ったおばあさんと目が合って、思わず胸に熱いものがこみあげて来たのを今もって忘れられない。

若松駅からは馬匹を運び馬糞がこびりついている貨車に乗せられ、扉を閉じ、中は真暗な極秘裡の輸送であった。やがて列車が停車し扉が開いて着いた所は、後で分かったのだが山口県の下関駅だという。ここから船で朝鮮の釜山に上陸。ただちに輸送列車に乗り、一路北上して満州国に入り、いよいよ第一線である中国大陸へと南下した。

満支国境鎮南関を通り、右手に万里の長城がはるか彼方に見える。一月の気候といえは零下二〇度は下っているであろう酷寒である。小便をしに便所に行った。小便がつからのように凍り付いている寒さだった。列車は敵機の攻撃も受けず一路南下し、車窓から見ると、南京城だと教えられた。南京城攻略戦の激戦の跡が、赤レンガの城壁にどす黒い血の流れとして残っているのが所々に見えた。いかに戦いのすさまじかったかを物語っていた。列車からこんどは揚子江（川幅約千メートル）を船で遡行し、蕪湖という街を経て茨港まで上って行った。途中我々の船と並航して行く船には、台湾からの看護婦さんだという、大勢の女性が

船の甲板に出て、「日の丸」を振っている姿に出会った。

茨港に到着、ここからは螢石という鉱石を運ぶ無蓋貨車に乗り、中隊の駐屯する金華の駅へ到着する。途中、発車後一時間くらい走ったところで自分達の乗っていた貨車と後車十台ほどが脱線して、枕木の上を約一キロほど走ったものだったが、よくも転覆しなかったのが不幸中の幸いであったと、皆で胸をなでおろした。

金華の街は自分達が到着する数カ月前の浙贛作戦で入城した所で、我々の到着した頃は住民も避難していた街の中はひっそりとしていた。昭和十八年の初頭ともなると市街にも住民は戻り、急速な復興のきざしが見え初め、目を追うごとに街は昔のにぎやかさを取り戻してきた。

師団の警備体制も完璧となり、外出も帯剣一つで出掛けられるようになった。この金華城街は約一キロ四方で旧若松市ぐらいの街である。

この県城の歴史は古く、中国の春秋時代は呉の都として栄えていたという。南船北馬という言葉があるが、金華江という流れに恵まれ、その流れを利用して遠く杭州や上海まで交易をしていた。県城外の土地は豊穡で産物も多く、当時の中国民の生活には不可欠のろうそくの産地として知られていた。呉の都、南京からははるかに遠隔の地であるが、名將諸葛亮の統治を得て、金華の地は栄えに栄えたという。街の人口は約十万人とも言われ民情は真に大らかで、占領間もない駐留部隊の我々にもすぐ慣れて、共存共栄の和やかな生活を送るようになった。

金華市街は四方高い城壁に囲まれていて城内に入るには東西南北に城門がある。城壁の中はトーチカになっていて、所々に銃窓が開いていて、城壁内どこへも通じている。すぐ前には金華江の豊かな流れ、三方は金蘭大平野で北方は小高い丘が続き、春ともなると川辺の揚柳の若葉が風にゆれ丘の上には桃の花が咲き、城壁の河端では女の人達が手に短い棒を持って洗濯物をばたばたとはいっているなど、正に平和そのも

ので、戦争なんかやっているのかと思われるのどかな風景であった。

金華には師団司令部、工兵隊、そして第三大隊の第十中隊及び第十二中隊が警備駐留していた。連隊本部は遠く道盧という第一線の街にいた。自分は第十中隊の軽機班第一班に配属され、初年兵教育を受けた。教官は登丸少尉、助教は桜井伍長、助手は増田兵長と羽鳥上等兵であった。班編成も終わって初めて見る十一年式軽機関銃や三八式歩兵銃などを渡され、明日からの内務班生活について説明され、一息ついたと思ったら早速、増田助手から自分と渡部君が暗い階段の下に呼び出され、入隊第一声の気合が掛ったのだった。

「お前達二人は入隊した初年兵の中で必ず中隊の中堅として働いてもらわねばならない者と見た。しっかりと頑張るようにな」とのことであった。

我々が入っているこの兵舎は元中国の富豪の館で、二階造り□の字型に部屋が造られてあり、中隊約百二、三十人が入ってもまだ部屋があるぐらいの大きな家である。

いよいよ我々は、中隊の一員として軍隊生活が始まった。起床と共に朝の点呼、そして食事当番は食缶を持って大隊本部に飯をもらいに行き、班長室へ古参兵室へと飯を運び、その後自分達の食事である。よくかんで物を味わう等という事は初年兵時代には通用しない。誰よりも早く食べると言うよりのみ込んで、班長室そして古参兵の食器を下げる。食缶上げは当番制だが食事が終わると演習の支度である。

営門を出て、北側の丘の連なる桃畑のある所が我々の演習場であった。演習は午前三時間ぐらい、帰隊して昼食、午後の演習と毎日繰り返してであった。何と云っても演習に出ている時が我々初年兵にとっては一番の憩いの場であった。演習から帰ると班長、助手の巻脚半を取ってやり、靴下または下着の洗濯などをしてやらねばならない。へまをすれば全員の責任とされ、たちまち回りビンタである。責任を他人になすりつけたりすると青竹でたたかれ、その丸い竹も割れるほどたたかれたものだ。軍隊生活の中で忘れられないのが、この内務班のしごきであった。今思えば人間扱

いではなく動物扱いの仕ぐさであった。

このような体験は、軍隊に入った誰もが味わされた心痛の種であった。それに軍隊は員数観念がきびしく、衣服検査は支給されてる員数が一個でも足りない時は「他の部隊に行つて持つて来い」と盗みを指示するようなもので、検査の時だけ員数が整っていれば良いということである。

このような生活も六カ月が経ち、第一次選抜にて一等兵に進級した。この時は同年兵六、七十人中十数人のトップであった。次の作戦準備のため部隊は全員、金華の警備に付いていたので、我々初年兵は第二期教育ということで、一般教育のほかに作戦要務令やガス教育など六カ月を終了して、一選抜の上等兵にトップで進級することが出来た。

三年次兵には、まだ一等兵の者もいたようだが、新兵の上等兵になつても古参の一等兵には頭が上がらない。これで一人前の兵隊として、班編成も古参兵との混成となつた。この頃、杭州方面から邦人の商社も幾

つか乗り込んで来て街も活気づき、日曜日の外出等が楽しみとなつた。我々新兵は街でそばを食べたり、饅頭を食べるのが何よりの楽しみであり、城壁の周囲の散策もした。

昭和十八年六月には召集兵第一次補充兵が入隊して、中隊は新たな戦力を得て活気づく。九月には十四年徴集現役兵の一部が除隊して行つた。我が第十中隊の任務は主として城壁の東方にある中正門の警備と、その郊外にある飛行場の警備であつた。中正門は城内に入る者が最も多く通り、一人一人検問をしなければならぬので分哨を設けてある。門の高さは約十メートルの鉄の扉で開門は午前八時から午後五時までで、以後扉を閉め、城内の上を動哨して警備に当たつてゐた。一週間の勤務交代で、衛兵司令以下約七、八人歩哨の立哨時間は、控え一時間、立哨および動哨一時間の二時間勤務である。時には古参兵が交代時間に起きにくい、三時間も勤務することも珍しくなかつた。

衛兵所の隣に豆腐屋があつた。まだ暗いうちから起

きて豆腐の製造を始める。夜の動哨は体が冷えるので、不審番をすると隣の豆腐屋へ行って体を温め、しぼり立ての豆乳に砂糖を入れてごちそうしてくれた豆腐屋さんのことは今も忘れ得ぬ思い出の一つであった。また飛行場分哨はただ広い原野を動哨するだけなので、一時間の動哨勤務はとても長く感じられた。

城壁の東から西に流れる金華江には通済橋という石橋があった。その造りは我が国の宮城二重橋のような石積みで長さは約百メートルくらいはあった。真ん中の一部を爆破されていて通行は不能であった。現在のように建設機械もない時代に手積みでこのような立派な橋を造った当時の中国人の技術と根気のよさには、ただ感服するばかりであった。

金華城を占領して第二十二師団の警備体制も完全になり、住民もほとんど帰宅して平和を謳歌する笑い声が城内に行き渡っていた。中隊の兵隊達も自由に散策して住民達とも接触して楽しみを味わっていた。

我々十七年徴集現役兵が入隊してから、中隊内は一

挙ににぎわいを見せ、班内では古参兵たちが初年兵を囲んで故国の話し等に興じていた。師団は新たな戦力の増加を機に、初年兵教育の基本大綱を定めて各部隊に通達してこの徹底を計った。

- ① 基本体力の養成に重点を置くこと
- ② 訓練計画の単一を計ること
- ③ 漸進合理的訓練の実施
- ④ 軍隊生活への訓化と私的制裁の厳禁
- ⑤ 自信を付ける訓練
- ⑥ 給休養との適合

等々で師団を挙げて健兵対策に取り組む事を各部隊の中隊長に訓令を発した。

健兵訓練の一環として武術奨励のため射撃大会や銃剣術大会を催していた。第三大隊でも銃剣術の大会が催され、自分も中隊から選抜されて出場し、優勝したこともあった。このような実績を認められて各中隊から古参兵を含め銃剣術の達人三、四人ぐらいで混成分隊を編成し、金華の街から約二十キロ離れた所の駅に分哨を設けた。鉄路の警備は約四キロの鉄路を動哨

し、異常の有無を点検、勤務が終わると銃剣術の稽古に励んだ。

ある日のこと、警備中に不審な中国人約二十人を捕虜にして後手に縛り、数珠つなぎにして尋問したところ、敵地の住民で駅を襲撃する目的で近寄って来たりしい。我々は交代で彼らを見張っていたその晩、別の連中が仲間を取り戻しに来て、分哨のある駅に向かつて発砲して来たので我々はこれに反撃した。そして彼らが集まっている一軒屋を見つけ、これに火をつけて焼いてしまった。

炎は暗い夜空を赤々と照らし、その中を駅の分哨まで戻って来たら、トーチカ内に閉じ込めておいた人数が半分ほどトーチカの銃眼から這い出て逃げてしまった。この駅分哨は無防備で、いつ敵に襲撃され占領されるか分からない。鉄条網くらいは張りたいものだなと皆で話しをしていたところ、捕虜の中の一人が、ここから八キロくらい行った部落のクリークの中に鉄条網が沈んでいると教えてくれた。早速我々は住民と一緒に七、八人で出掛けて行った。

なるほど四、五十戸ほどの部落があり、部落の端に一反歩ほどのクリークがあった。周囲は田園と畑である。このクリークはこの部落のかがい用水と養魚池だという。かなりの魚もいるらしい。皆でクリークの一部の土手を切って水を流し、各兵隊の擬装網を継ぎ合わせて大きな網を作り、両方で池の中を引っ張っていったら鯉が籠に二杯分も獲れた。

今夜は鯉料理かと笑いながら池の水の引くのを待つて池に沈んでいた鉄条網を引き上げ、やれやれと衣服を着けている時、部落後ろの小高い丘の上にかんりの敵兵がぐるりと取り巻き一斉に射撃してきた。我々が池の中ばかりに気を取られているうちに、いつの間にか部落民から通報されたらしく、三方を囲まれた形で攻撃される破目になってしまった。鉄条網どころじゃない。一目散に畑の中を駆けて逃げたが、敵からは丸見えである。「バンバン、バリバリ」とチェコ機銃で撃つて来る。ふと左の方にトウモロコシ畑があったので夢中でその中へ逃げ込み無我夢中で逃げた。ようやく敵からは遠く離れた所で各人の異常の有無を点検し

た。

幸い誰も負傷者もなく全員無事ではっとしたところが、今度は自分の帯剣が無い。もう今から戻って捜すだけの時間がない。夕刻になっていた。分隊長も「今日は帰って明日捜しに行こう」と言って分哨へ戻った。残留した者に「トウモロコシ畑に逃げ込んだ時に、幹に引掛って抜けたものと思う」と、今日の状況を説明した。

自分はマラリア熱が発熱してそのまま寝込み翌朝になっても高熱が下がらない。古参兵の桑原さんが「よし、大竹お前は寝ている。自分が捜してやるから」と言って、トウモロコシ畑に落ちていたと言って拾って来てくれたのだった。いかなる理由があるにせよ、陛下から授与された兵器を紛失したとあっては、今日まで一生懸命軍務に精励して来てもこれで水の泡である。がっかりしていたのだが彼が見つけて来てくれた。このご恩は一生忘れまいと心に誓った。

この時が戦地へ来て初めて敵の弾丸の下をくぐった体験となった。そして自分たちは、引き揚げた鉄条網

の事などを交代した部隊に申し送りして、約一カ月ぶりに帰隊した。

太平洋戦争も次第に激化し、急迫する戦局の中で、我が中隊は金華城守備の任務を続行していた。南方戦線苛烈となるや和戦再様の作戦指導もあって、重慶政府に対しては和平機運を醸成させる目的で、杭州中心に日華親善と和平を謳歌する宣伝映画製作を命ぜられた。

福島県出身の映画俳優だった大日方傳氏が金華に来て「戦いつつ建設」というシナリオで、自分達が金華郊外の野原で中華電影のスタッフと共に映画撮影、自分が軽機を持って敗走する敵を撃っている一コマであった。後日、中隊宿舎で大日方傳氏から説明を受けながら中隊全員で観賞し、和平工作に一役買ったものだった。この頃、内地から慰問団が来て、歌や踊り等を観賞することが出来、殺伐とした戦場で一時の和やかな気分を味わうことが出来た。